

[発達心理学概論 [特論] 第V章:第2講]

人間発達の可塑性

ことばが遅滞するとき

-養育放棄の中でのことばの育ち-

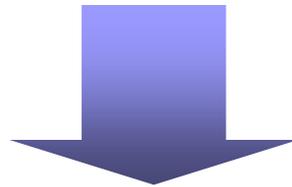
内田 伸子

(お茶の水女子大学 発達心理学)

発達最初期の情緒的交流

Maternal Deprivation(母性的養育の剥奪)

生後 1年間、母親は乳児の**すべての動作**、
すべての認識の媒介者となる。(Spitz, 1932)



『母性的養育の剥奪』

単なる心理的交流の欠如ではなく、
社会的・文化的・言語的・心理的・栄養など
の複合的な刺激の剥奪

母性的養育の剥奪

Maternal Deprivation

単なる心理的交流の欠如ではなく、

社会的・文化的・言語的・心理的・栄養

などの複合的な刺激の剥奪

⇔ **安心・安全基地が奪われること**

育児放棄の事例

回復				[分離不安]	
				大人	同胞
良好	イザベル	[米]	(6歳6ヶ月)	+	-
	P.M.とJ.M.	[チェコ]	(6歳10ヶ月)	+	+
不良	アンナ	[米]	(6歳0ヶ月)	-	-
	アンヌとアルバート	[米]	(6歳と4歳)	-	-
中間	ジニー	[米]	(13歳7ヶ月)	±	-
	FとM	[日本]	(6歳と5歳)	-	±

剥奪期間の長さよりも質が問題

FとMの物語

第5章

FとMの事例 20年間の追跡

F : *female*

M : *male*

治療・回復計画

(1) 環境改善

担当保母との愛着，同胞・仲間・成人との対人関係の形成，
栄養改善，言語的・認知的・文化的刺激の導入，
感覚・運動技能の発達

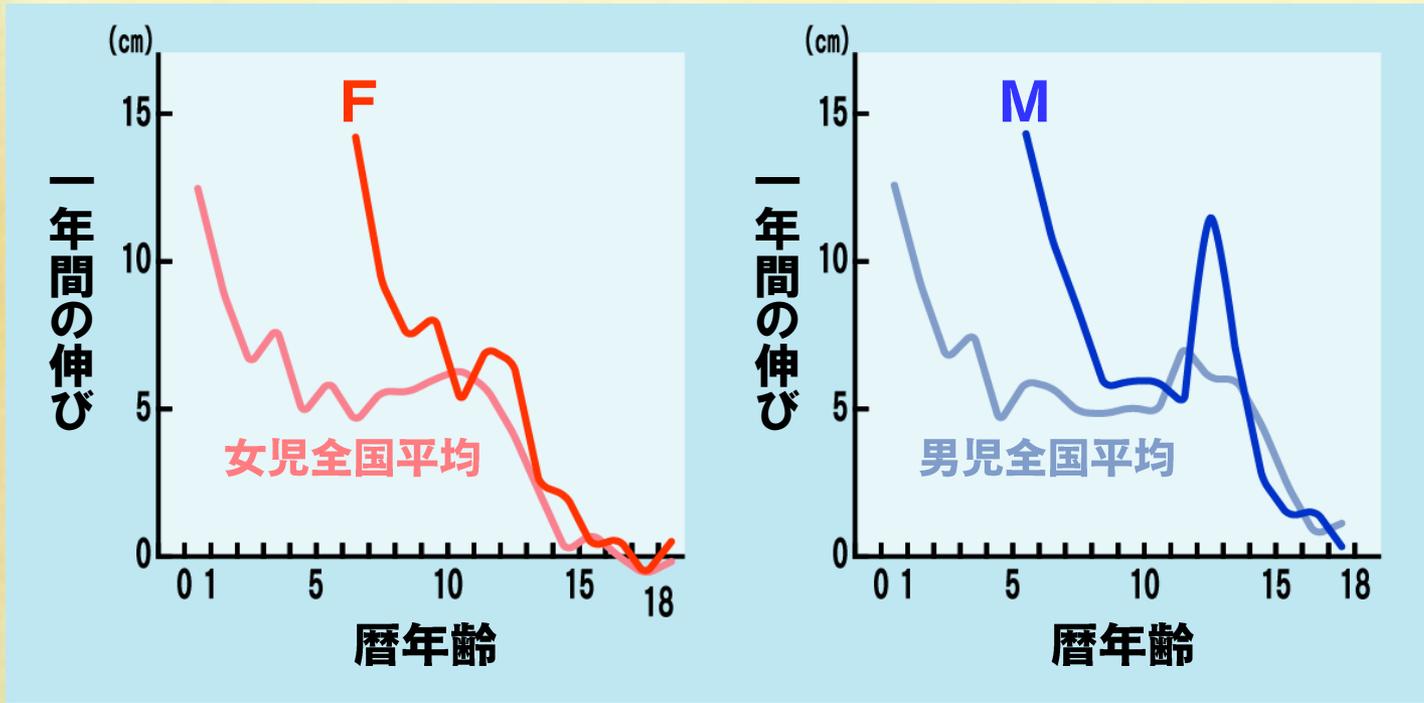
(2) 診断（測定と訓練）

- ① 社会・情緒的発達
- ② 知的能力の発達

(3) 補償教育（教授・学習プログラムの開発と導入）

- ① 言語発達
- ② 数概念の発達
- ③ 一般知識の獲得

発達速度曲線 (身長)



(藤永 他, 1987)

初期言語発達の経過（救出後4ヶ月）

	F	M
(1) 語彙能力	74	20
(2) 仲間とのやり取り	有	—
(3) FとM間の関心	有	—
(4) 意味不明語	少	多
(5) 発音（反響語、幼児語、錯音）	少	多
(6) 文法能力	高	助詞未

保育者への愛着 (attachment)

F

- 救出後すぐに担当保母になついた
- 仲間が担当保母の膝に座ると嫉妬する

M

- 担当保母・仲間との
対人コミュニケーションが起こらない



「ストレンジ場面手続き」で確認

ストレンジ場面手続き

(Ainsworth, M. D. S., 1978)

エピソード	登場人物	時間	行動内容
Ep.1	M, C, E	30秒	EはCのスタート位置を示す
Ep.2	M, C	3分	母は本を読みCの要求があれば応ずる。Cが2分経っても遊ばなければ、母が遊びに誘う。
Ep.3	M, C, S	3分	S入室。 1分は黙っている 母と話し2分したらCに近づく
Ep.4	S, C	3分	母と分離。 Cが遊んでいればSは見守る。Cが遊ばなければ遊びに誘い、混乱したら慰める

[M=母 C=子供 S=見知らぬ女性]

エピソード	登場人物	時間	行動内容
Ep.5	M, C	3分	母と再会. Cが遊びに戻れるように援助. Cが落ち着いたら「バイバイ」と去る
Ep.6	C	3分	母と分離
Ep.7	S, C	3分	S入室. Cが遊べば見守り, 混乱したら慰める
Ep.8	M, C	3分	母と再会. 入口で名前をよび 「おいで」とよびかけ入室. Sが退出. 母がCを慰め, 遊べば見守る

[M=母 C=子供 S=見知らぬ女性]

ストレンジ場面手続き

(The strange situation procedure)

Bタイプ 母親に安定した愛着を示す

母親がいれば安心して探索行動をする。母親と見知らぬ人には区別して行動。母親と再会すれば喜びを示し、すぐに探索行動に戻る。

Cタイプ 母親に不安定な愛着を示す

母親がいても実験場面になじめず母親が退出すると混乱する。再会すると抱っこをせがみ、母親がいてもなかなか機嫌が直らない。

Aタイプ 母親に愛着を示さない

はじめから母親に関係なく行動する。母親が退出しても平気。母親と見知らぬ人に対する行動に差がない。再会しても無視する。

タイプ	B	C	A
アメリカ中間層 (Ainsworth, M. D. S., 1978)	70%	10%	20%
札幌市内 (高橋, 1982)	66%	34%	0%
北部ドイツ (Grossman, K., 1982)	33%	12%	49%

愛着 (attachment)

母親と乳児の心理的絆

- ← ①人見知り (stranger anxiety)
- ②分離不安 (separation anxiety)

- 生後7, 8ヶ月から出現する

- 兆候はもっと早くから見られる

Carpernter (1975): 生後2週目
母以外の人が話しかけると嫌悪感

Ambrose (1961): 生後14週目
見知らぬ人には微笑しない

Brody & Axelred (1971): 4, 5ヶ月児
見知らぬ人が近づくと緊張する

- 8ヶ月頃から拒否的反応, 生後2年目(1歳台)でピークになる

- 分離不安は人見知りよりも遅れて出現

分離不安 (separation anxiety)

●直接的原因 ←母親が乳児から離れること

▲伝統的理論の答:

連合学習の原理 (母在 → 快 ・ 母不在 → 不快)

◎反証例

Schaffer & Emerson (1964): 生後2週目

乳児の20%は**身体的世話をしない人**に分離不安を起こした

Schaffer (1971)

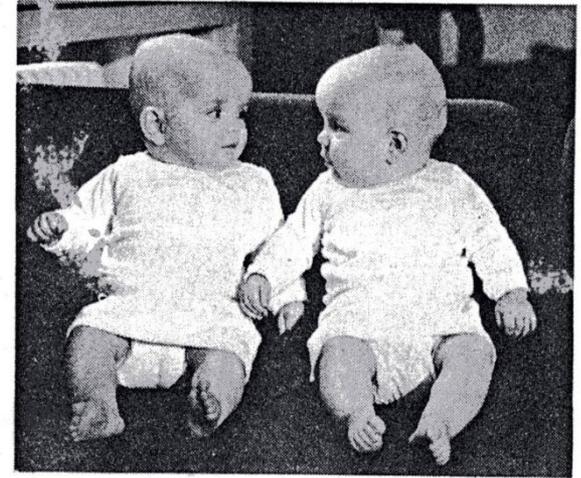
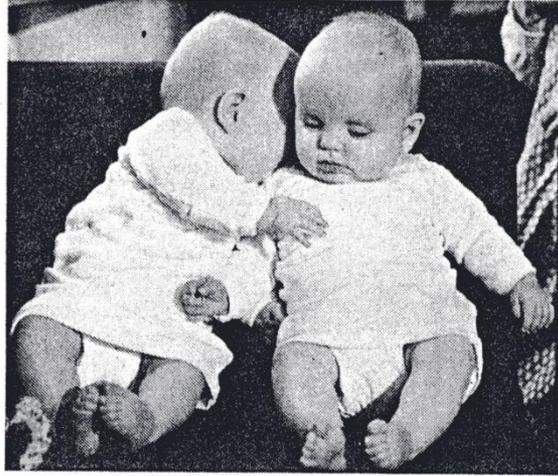
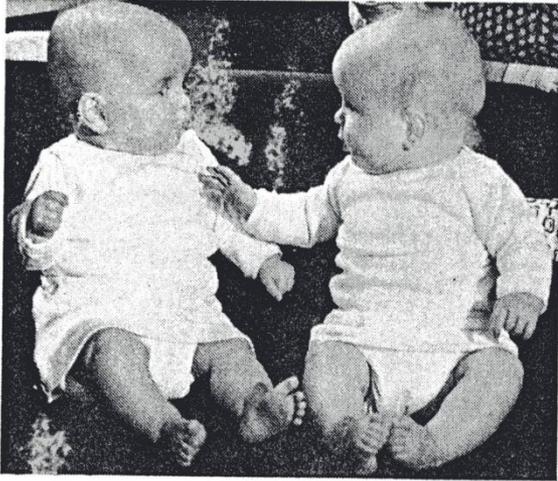
分離不安の的は乳児と**社会的やり取りを頻繁にしてくれる人**である

Freud & Dann (1951)

捕虜収容所に収容された**6ヶ月児6名**が解放されるとき互いに分離不安

Bower (1977)

麻疹に罹った**双子の娘の一人**を隔離するとき残された娘が分離不安



**Seven-month-old twins communicating with each other.
Twin babies characteristically become closely attuned
at an early age. (Photos by Jennifer G. Wishart.)**



The response of an eight-month-old baby to a stranger's attempts to communicate. (Photos by Jennifer G. Wishart.)



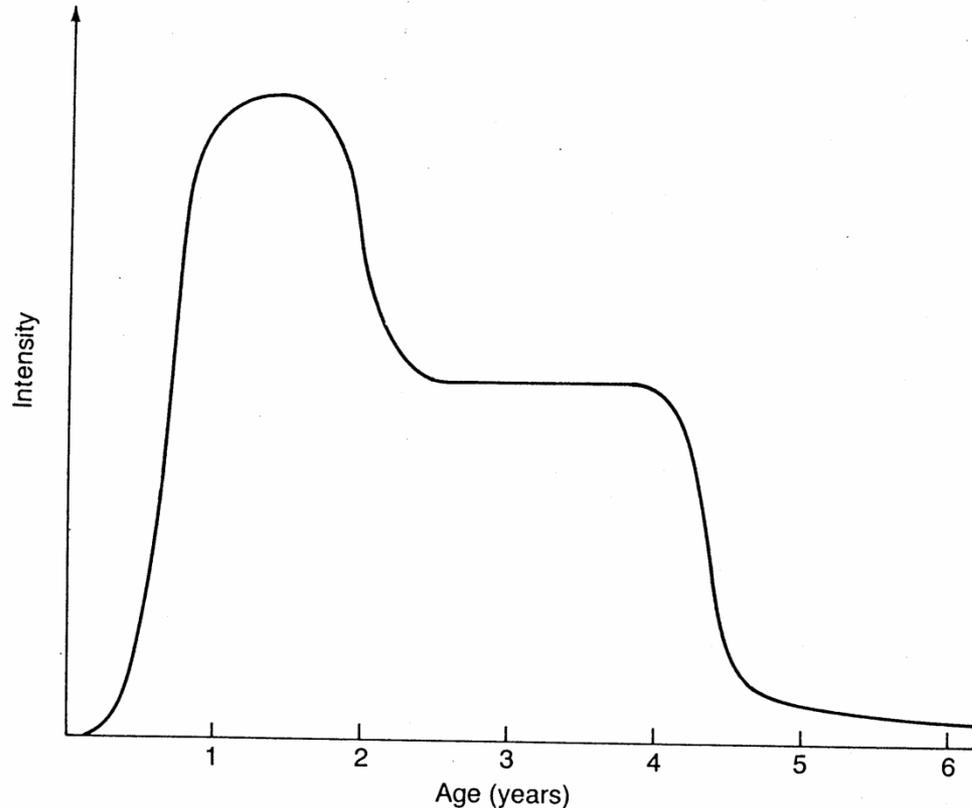
These ten-month-old babies were strangers to each other before this meeting. One baby pokes the other to get her attention. The second baby then asks for the toy.

(Photos by Jennifer G. Wishart.)

愛着形成のコミュニケーション理論

by Bower, T. G. R. (1977)

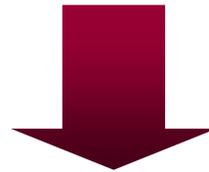
- **愛着＝コミュニケーションの準備性**
社会的相互交渉の中で乳児と母親の間に
非言語的コミュニケーションのルーチンが形成される
それは、その母子間でのみ通じる
- 7ヶ月頃：母子間に**精妙なルーチン**を形成
- 母に去られた乳児は？
自分のメッセージを読解してくれない
見知らぬ人 → 「**同じことば**」を話さない人
と取り残されることになる
→ **相互作用不可** → **不安**
- **公共的なコミュニケーションの手段**
ことばの獲得 → **不安は低減** (図1-4)
(cf.,テキスト39-41ページ)



The changes in intensity of separation anxiety with age. The data are compiled from a number of studies; hence the curve is only a general indicator of the direction and rate of change in response.

FとMの回復速度の違いをもたらしただものは何か？

★「ストレンジ場面手続き」で愛着成立を検証



保育者への愛着
attachment!!

「愛着」機能的準備系

成人との愛着の成立

外言的コミュニケーションや
対人的適応の機能的準備系

(1) 人間の発達はいかに可塑性に
富んでいるか

(2) 子どもの発達に何が必要か

→ 「愛着(attachment)」

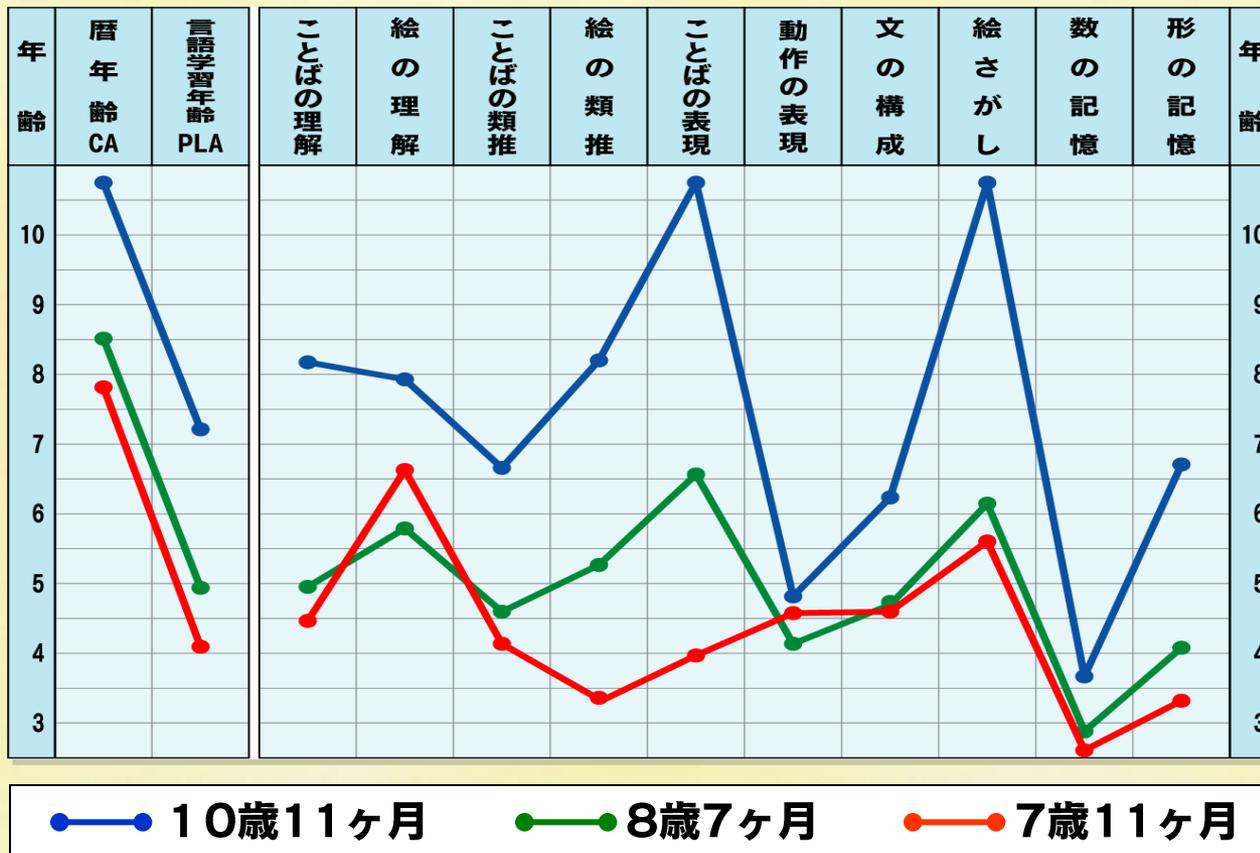
「FとMの物語」

その後の回復経過

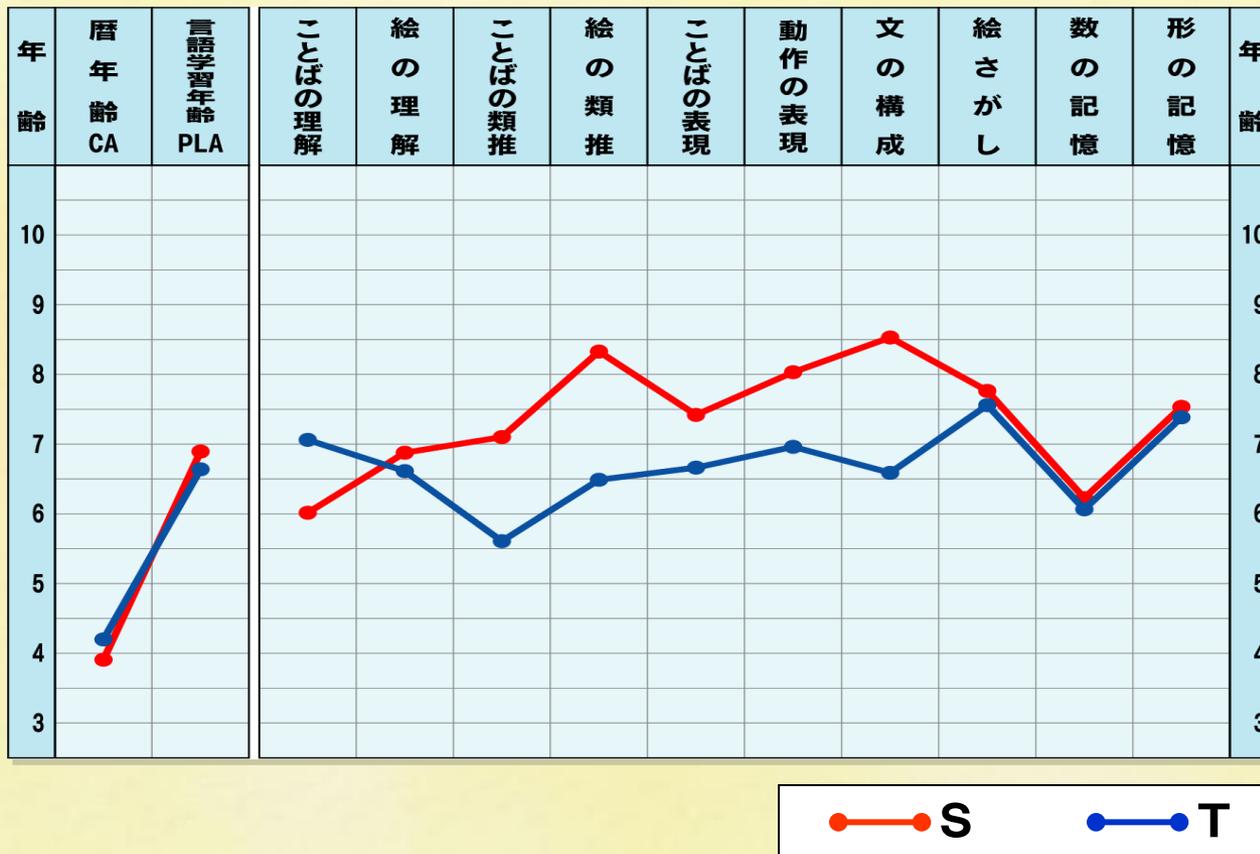
[テキスト 第V章の後半]



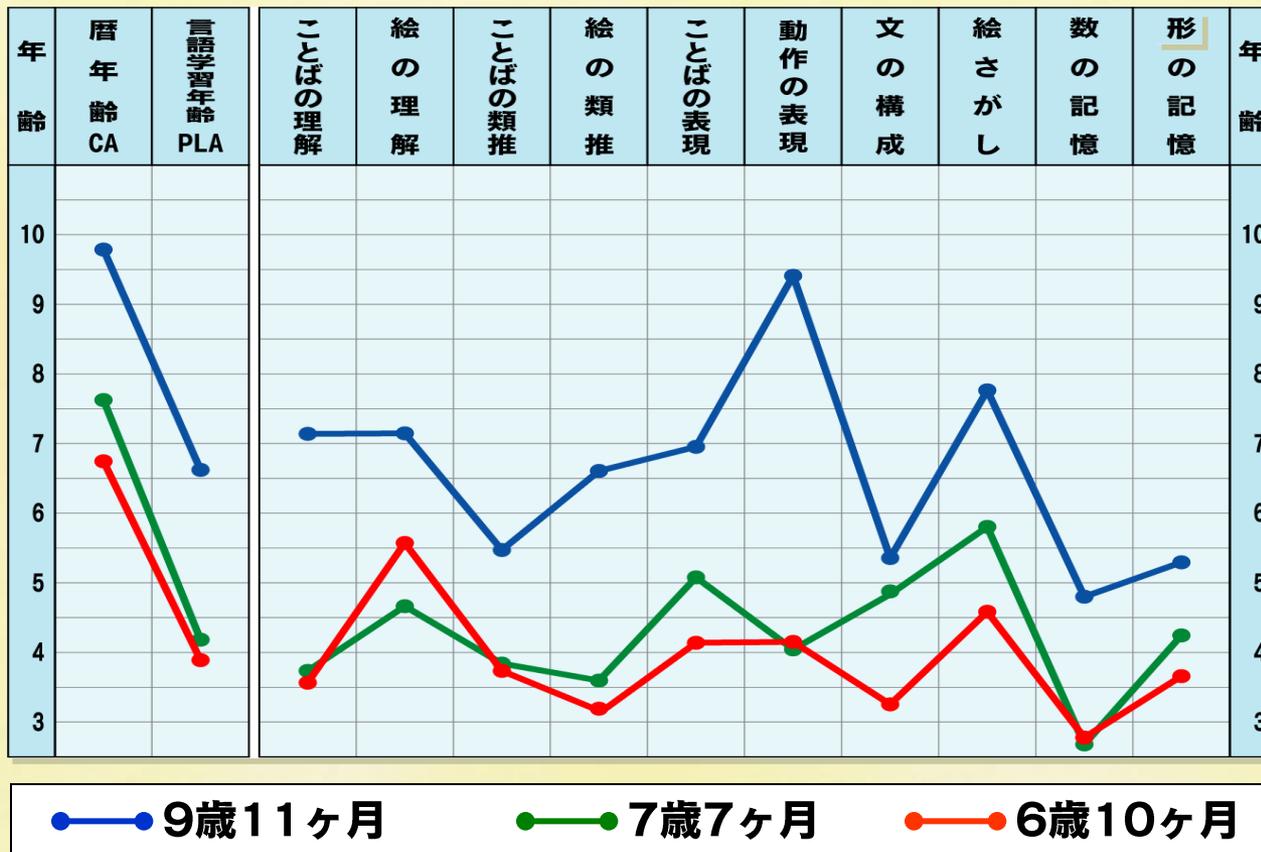
FのPLAプロフィール (言語学習能力)

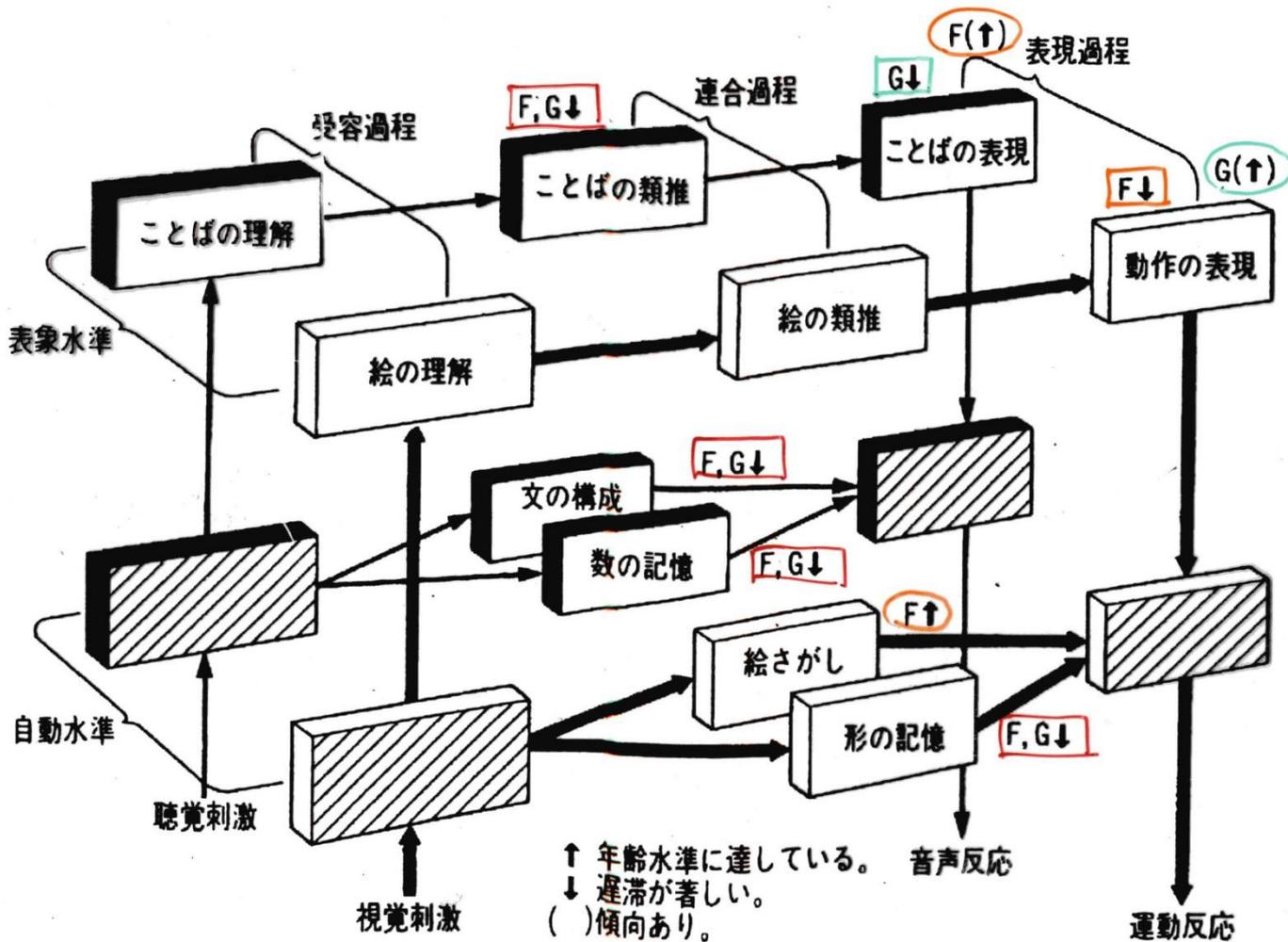


ITPAプロフィール (言語学習能力)



MのPLAプロフィール (言語学習能力)

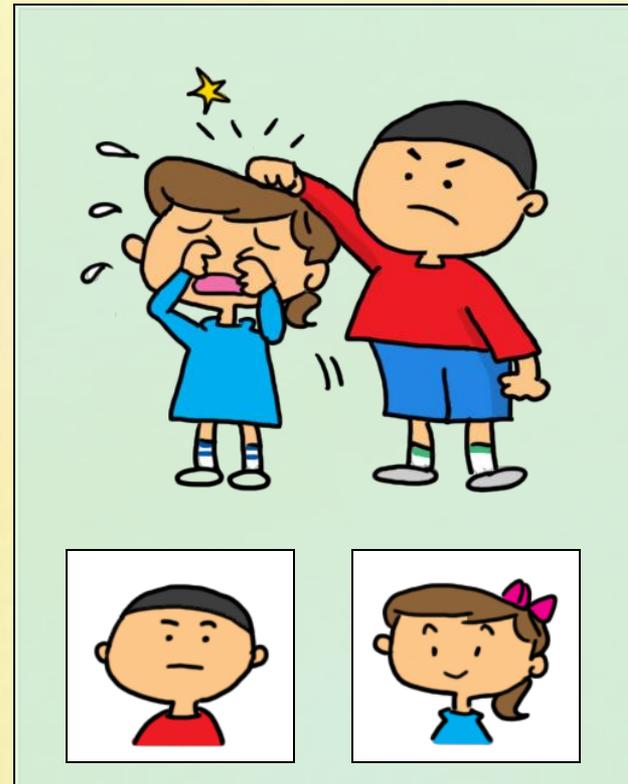




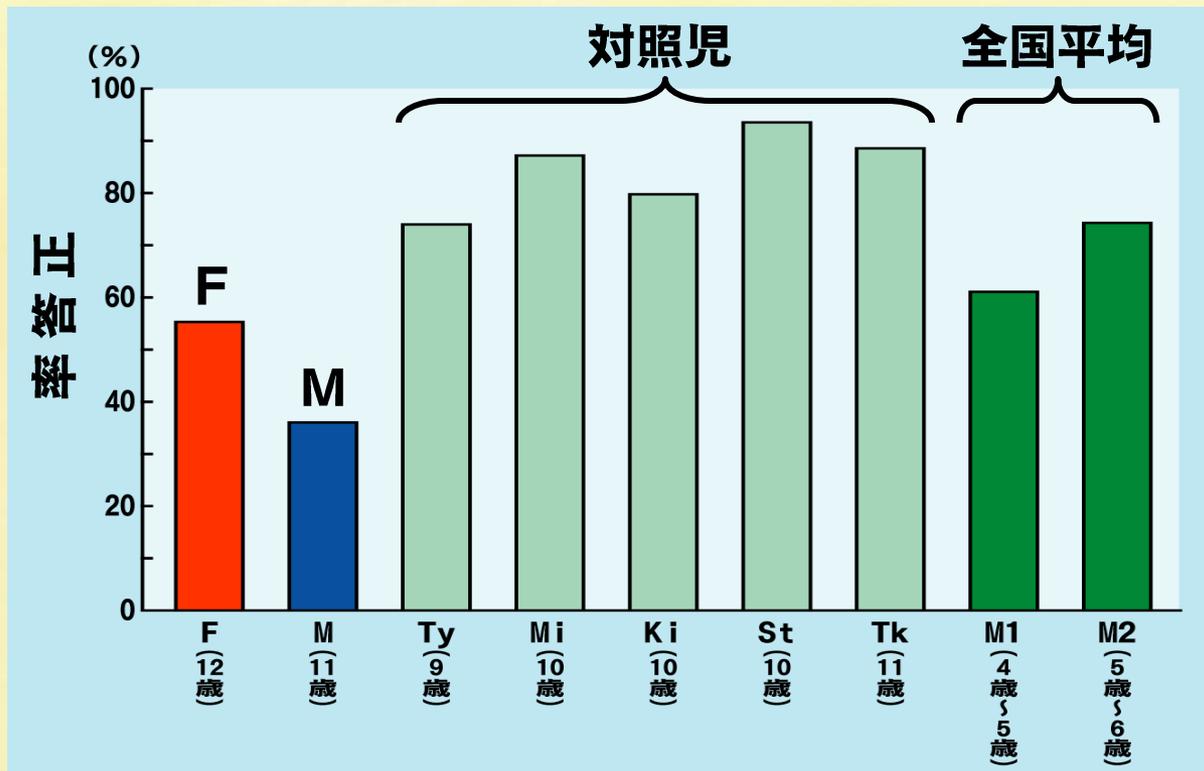
「ITPA臨床モデル」(手引書 p.5より引用)
対応させたF,Gのパフォーマンス

F G共に欠陥
記憶機能 ↓
推理機能 ↓
連合機能 ↓

能動・受動の変換テスト



能動・受動の変換テストの結果



内田 1987

FとMの知能の回復経過

1. 言語性検査

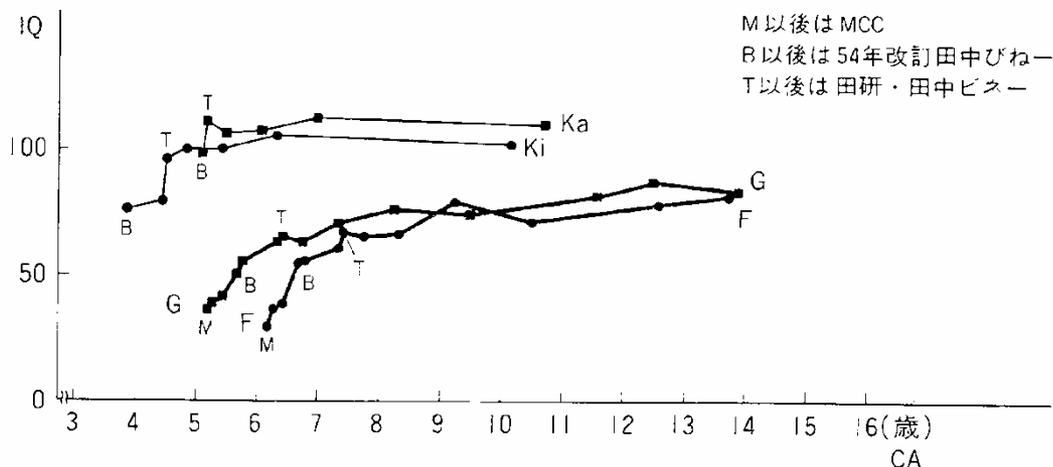
- 田中ビネー知能診断検査
- WISC知能診断検査

2. 非言語性(図形)検査

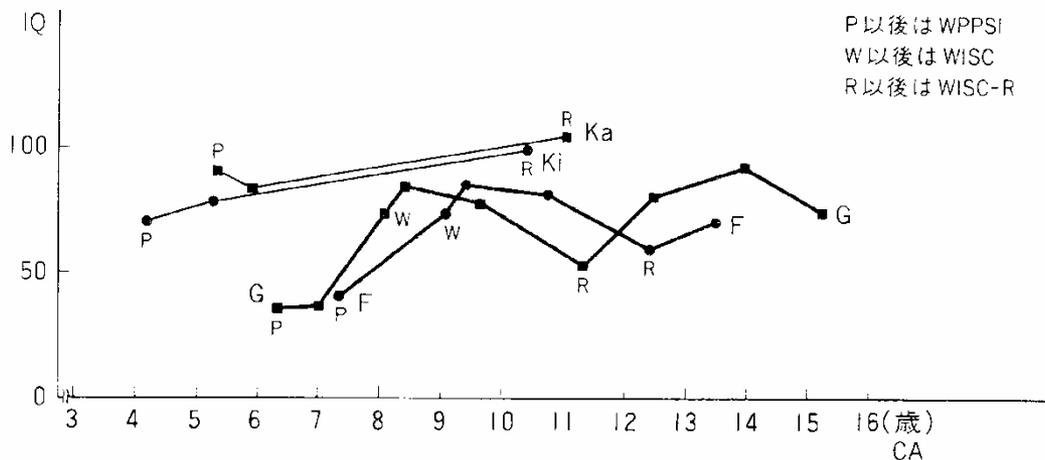
- SPM(Standard Progressive Matrices Test by Raven)

F・Mとも、IQは70→ふたりは遅滞児？

140

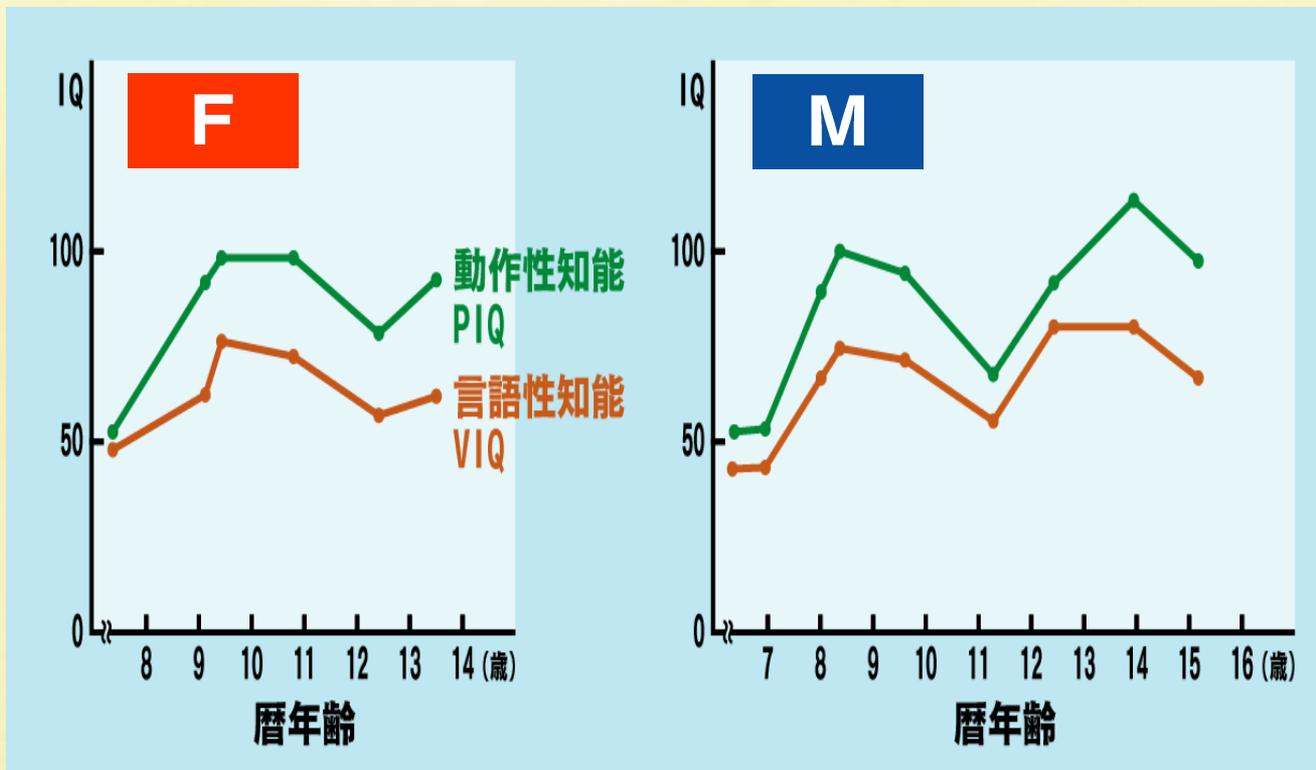


FとMのMCCと田中ビネー検査のIQの経過(+対照児2例)



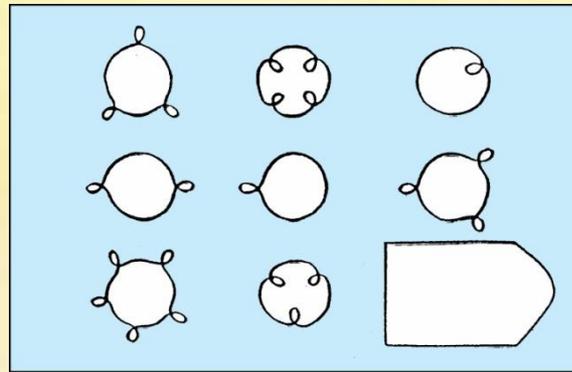
FとMのWISC系検査のIQの経過(+対照児2例)

WISC知能検査



SPMの成績→二人は優秀！

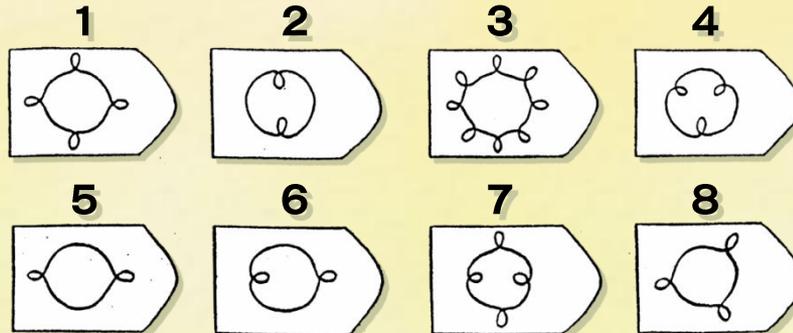
(Standard Progressive Matrices Test by Raven)



偏差値

F : 65

M : 50



FとMの物語の結末

To be continued.....